



会報

No. 31

—53. 12. 1—

みやま文庫

◆五十三年度の配本

大変おりましたが、五十三年度配本「利根源流の自然」「近世上毛雅人画像集」の二巻をお届けいたします。
なお、同年度分として以下次の二巻を予定し、刊行の準備を進めております。

- 馬城・雲糸子
- 上毛句碑めぐり

本書は、準備の都合からさきにご告知いたしました「群馬の古墳」に代り、差しかえになったものです。ご承下さい。

みやま文庫懸賞原稿応募規定

1. 募集原稿
 - (1) 郷土群馬に関する未発表の著作（みやま文庫に向くもの）
 - (2) 内容は高等学校卒業程度の学力で理解できるもの。当用漢字新かなづかいを原則とする。
 - (3) 執筆は個人でもグループでもよい。
2. 応募資格 みやま文庫会員（応募の際に入会可）
3. 宛 先 表 紙 表 紙 表 紙 表 紙 表 紙
4. 入 賞 毎 年 3 月 末 迄 6 月 末 迄 表 紙
5. 入 賞 一 編 賞 金 十 万 円
6. 入 賞 一 編 賞 金 十 万 円
7. 入 賞 一 編 賞 金 十 万 円
8. 入 賞 一 編 賞 金 十 万 円

◆五十三年度会費

会費の納入については、格別のご協力をいたしておりますが、まだ未納の向は、なるべく早期にご納入下さい。

◆今後の刊行テーマ

文庫の刊行テーマについては、さきに行なったアンケート等により、各位の協力いただきましたが、五十四年度以降のものとして、次のようなテーマをあげ、準備を進めています。

- 群馬の近代美術（上州の食べもの）
- 群馬の野鳥（群馬の現代小説）
- 上毛の墓めぐり、群馬の古墳
- 群馬の気象、上州のおんな（Ⅰ）
- 群馬の近代演劇

なお、これらについてのご注文をはじめ、ひろく皆様のご意見を寄せ下さい。

〒370-1104 群馬県前橋市日吉町二丁目二四一八
群馬県立図書館内

みやま文庫事務局

電話 前橋三二局三〇〇八番
振替 東京四一四二五九番

67 図書館の窓から（書評）

本書は、県内の各図書館の窓口によせられたレファレンスの中から、群馬県に関する事例とその回答を、二七件選択し収録したものである。収録された事例には「群馬事件の起り」「国定忠治―赤城山の名セリフ」「谷川岳の高山植物」「足尾銅山の鉱毒」など、県民ならずとも興味ある事例が散見する。各事例の解説の後には、出典や参考資料名が記載されている。ただし、専門書ではないので、資料名は二、三に過ぎない。また図書館のレファレンス・サービス事例集でもないで、それらの資料に至る過程も述べられてはいない。しかし、一項一項読んでみると、種々な知識が得られ結構楽しい読みものとなっている。それが本書の意図する所でもあろう。ただ「内容の項目配列は日本十進分類法に準拠」（あとがきより）しているのだが、目次には分類記号も主題の記入も省かれているので、ランダムに配列されているようにみえ、特定主題を探すにはいささか不便である。だが本文の後に付された事項索引がこれを補っている。

巻末には、県内の図書館、公民館図書室内一覧と、レファレンス統計などが付されている。

（国立国会図書館月報一九七八・一〇）

鬼城四十年忌によせて

中里 昌之

九月十七日は、明治、大正俳壇に大きな足跡を遺した村土鬼城の四十年忌であった。高浜盛子をして「古今独歩」の俳人と言わしめ、大須賀之字をして「明治大正の御代に出でて能く芭蕉に追隨し一茶よりも句品の優った」作者と推賞せしめたほどの俳句作家は、鬼城を指（お）いて他には存在しない。

*

鬼城にはみずからもとめて許した弟子はいない。門勢を張る野心もなかった。いわば孤高不昧（ぶまい）の風格の人であった。しかし、現俳壇の耆宿（きしゆく）で鬼城俳句の恩沢に浴さないものを押し出すのは難しい。それほどにその作品の力は、動かしがたい相貌（そうぼう）を帯びて迫ってくる。

冬峰の死にどころなく夢きけり

この句は、代表作として世に喧伝（けんでん）されたものである。しかし、筆者所見の鬼城真筆短冊に、「冬の峰死にどころなく夢きけり」と認（したた）めたものがある。晩年の、渾熟（こんじゆく）した雅致ある筆意にほど

の二句が幹雄によって大いに推重され、わけても「美しきほど」の句は口をきわめて激賞された。しかし、これは後年飯田幹笏が月並異ありとして退けた問題の句である。だが鬼城にとっては、記念碑的な作品であったに相違なく、大正十五年版『鬼城句集』に長い前書きを付して載せている。

これより先、正岡子規は日本新聞社に入社（明治二十五年）以後同紙士を中心に矢継ぎ早に俳句新興運動を提唱、身をもって新俳句の方向を示した。これに触発された鬼城は子規に書簡を送り教をこうしている。日蓮講和条約が調印された明治二十八年のことである。これより鬼城の俳句は、石田波郷の言葉を倒りれば「古典と競い立つべき、あの数々の名句へ向かつて成熟する歩みを進みはじめるのである。

*

ところで、鬼城の俳句的出立にあずかって力あった実弟平次郎については、ほとんど知られていない。吉川平次郎は芝州と号し、明治二十年ごろより旧派俳人として活躍した。矢島実来が大正に入って起こした土毛亭（大正吟社）に所属、大正九年三月二十八日、同社において立机（りつき）し、隣庵（とないあん）芝州宗匠となる。同年十二月二十七日（東京府下羽田町）にて死没、年五十四であった。逆算するとその生年は慶応三年となり、鬼城に遅れること二年である。

遠いところからしてあるいはこれが、初形であるかもしれない。

生きかへり死にかへりして打つ田かな

鷹のつらきびしく老いて衰れなり

己が影を慕うて這へる地獄かな

これら人口に膾炙（かいしや）した句は、いずれも庶民の哀歎が深く広い生命意識ではあくされている。

*

鬼城の俳句は、その実弟吉川平次郎の影響下に出発している。宗匠（そうしやう）俳諧（はいかい）（はいかい）が流行した明治の二十三、四年ごろのことである。明治二十五年には鬼城の境遇に大変動が生じた。すなわち、父と妻の死亡のために家屋敷を取られ、生活の根拠地を失ったこと、さらに醜態の悪化などがそれである。こうした実生活上の不如意がもたらす鬱憤（うつじやう）のはけ口として、俳句が活発にはじめられたのである。句作の動機はかくの如く単純極まるものであったが、しかしあくまでも鬼城にとって「詩は志をいう」という考えであった。そしてその俳句観は、生涯一貫して変わっていない。

たまたま、宗匠（そうしやう）俳人（はいじん）春秋（しゆん）藤（とう）幹雄（かんゆう）が群馬県にきた際、弟平次郎の仲介で俳句作品を見てもらうことができた。「掛名も上手下手ある世なりけり」又「美しきほど衰れなりはなれ戀」

平次郎は種々の遊びにもたけた風騷（ふうそう）の人であったと言われる。世話のやけることも少なからずあったと伝えられるが、鬼城はその弟の死に当たり次の句を作って悼んでいる。

大正九年十二月家弟亡

はらからに火かけて焼くや年の事

若年時の芝州の発句については、いま知るころはない。が、おそらくは幹雄一派の俗俳を超えたものではあるまい。幸いに大正八、九年ごろの発句が多少遺っていたのでいくつか次に示しておく。

草の雨蛙啼く夜となりけり

五月雨や草になりたる鳥の糞

釣忍日よけばづせば戦きけり

これらの作品は、鬼城一代の名句とはもちろん比較すべくもない。しかしながら、若き日の鬼城を俳句の道へ導いた人物の最晩年の句であると思えば、いわれなき感懐（かんわい）と知りながらもそこはかたないあわれを覚えることを禁じ得ないのである。

（群馬県立西島実業高校教諭・俳諧史研究家）

昭和五三・九・二五朝日新聞